

Management Club Report

Mar.2006/Vol.39

Monthly Opinion 組織モチベーションを高める

プロ野球日本代表がくれた久々の感動

先頃行われたワールド・ベースボール・クラシックでは、多くの日本人がスリルと感動を等しく味わうことができました。準決勝と決勝の2試合はテレビ放送の視聴率が50%を超えるという脅威的な数値を記録したそうですが、私もご他聞に漏れずテレビの前に釘付けにさせられた1人でした。

野球中継をプレイボールからゲームセットまで通して観戦したというのは、何年ぶりだったのか記憶にないくらいで、そういう意味で今回は自分にとっての快挙でもありました。長嶋茂雄が新人だった頃の巨人が、西鉄ライオンズに3連勝4連敗で負けた日本シリーズの中継を、7試合とも最初から最後まで近所の家でテレビで観たことだけは良く覚えています。その後もあったのかも知れませんが明瞭には思い出せません。特に近年は人工芝やドーム球場、画一的で騒々しい応援といった「作られた雰囲気」が嫌いだったり、ゲームの進行がまどろっこしく感じたりとかで、ほとんど見る気が起こらなくなっていました。

今回の世界大会についても大して期待感を持ってはいませんでした。いざ始めてみますと、ピッチャーの投球リズムはストライク先行型が多く、強制的な馬鹿げた応援もなく大変スピーディに感じられました。特に最後の2試合はトーナメント戦ということもあってスリリングな試合が展開され、事前期待を大きく上回るものとなったのです。

「野球って面白かったんだ」かつて少年雑誌の表紙は毎回のように長嶋選手や王選手によって飾られていたものですが、それらを見て育ったオールド野球ファンの多くが、きっとこのような感想を抱くと同時に、少年時代のヒーローだった王監督に絶大な拍手を贈ったのではないかと思います。

改めて野球の面白さを再認識させてくれたWBCですが、感動の原点は、年俸何億というプロ選手が、経済的な見返りを期待せず、しかもシーズン開幕前の大事な時期に身体を張った全力プレーを見せたことにあったのだと思います。

多くの代表選手が「日の丸を背負って……」という表現をしていましたが、お金以外の何かのため、つまり「国のために」身を捨てて臨んだ姿に心が揺さぶられたのです。

「国のために……」泣かせるフレーズですよね。「日本人が国際社会で尊敬されない面があるとすれば、愛国心の欠如だ」藤原正彦氏は『国家の品格』の中でそのような趣旨のことを述べていますが、家族や友人に対する気持ちと同様、国や同胞や故郷を大切に思う純粋な意味での「愛国心」の存在を、野球日本代